

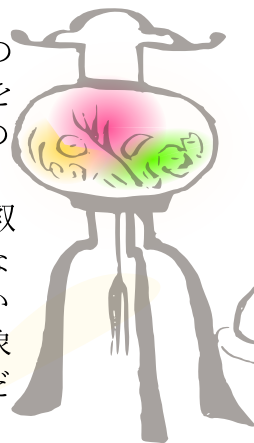
★回りに向かう ～仏壇について その一～

今回は、各ご家庭での仏壇への向かい方について、あれこれと申し上げたいとおもいます。

そもそも、仏間と呼ばれる仏像を祀る為の部屋を小型化したものが仏壇の始まりです。基本的な仏壇の作りとしては、一番奥の高い段に各宗派の本尊様や開祖様をお祀りするようにできています。

檀家様のお気持ちからすれば、一番高い段にご先祖様や身近な故人様をお祀りしたいところかと思われそうですが、仏壇の観念としましては第一に御本尊に向かう気持ちがその御本尊を通してご先祖様一切に及ぼすものとしします。

我が宗派は天台宗系に属しておりますので、仏壇の御本尊としては阿弥陀様か御釈迦様をお祀りするのを勧めております。さらにその両脇には中国に於いての天台宗の開祖とされる天台大師智顛を向かって右に、左にはその智顛の教えを日本に於いて発展させ、比叡山を開かれた伝教大師最澄をお祀りします。しかしながら御本尊と両脇の諸尊も必ずしもそれと決まっているわけではなく、もし個人的に篤信の信仰を持つ対象があらわれる場合は、それらを本尊や脇仏としていただいても結構です。



さて近年急速に、「仏壇を持つ意味が解らない。」、「法事や墓参りは煩わしいだけ。」と言った素直な意見を耳にすることがあります。私はそれらの発言をする人々を批判する気は全くありませんし、私自身もかつては仏教の形式というものに対して少なからず懐疑的な見解を持っていました。しかし、あることに気づいてからは、『もっと形式を利用しよう！』という考えに変わりました。

はっきり申して仏像も仏壇も、あくまでも物に過ぎず、また我々人間も様々な物質が仮に集まって構成されているに過ぎません。けれども、そこで忘れてならないのがその『在り方』にあります。例えば足元に転がっている空き缶と皆さんの御家族、この二つを我々は平等に扱うことができません。なぜなら御家族は皆さんとの『在り方』に於いて極めて重要なものであり、空き缶は取るに足らないものだからです。

では何故『在り方』によって差がでるのか？、それは我々が物質の世界で活動していながらも、証明不可能な意識の世界に強い臨場感を持って存在しているからです。さらに近代以前に比べて現代は高度情報社会と呼ばれ、我々の意識の世界はあまりにも多様化しています。そんな背景を踏まえると、今まで皆が当たり前にしてきたことに疑問や拒否感を感じる人が出てきて当然なのです。しかしそんな現代だからこそ、仏壇という形式をもっと利用すべきだと私は思います。

先に述べた私が気づいたあることとは、意識だけで信仰を成り立たせようとするその難しさと不自然さです。科学がどんなに進歩しても、人間ひとりがその自分の心を常に穏やかに保つことは不可能に近いといえます。ですからその不確定な意識にすべての重きを置くのではなくて、敢えて意識の外に礼拝の対象を設けて、さらにそこを『敬い』と『感謝』を行う窓口とする。そのような形式として仏壇を利用していくことは大いに善なることであると思います。

『敬い』とは頭ごなしに崇拜することではなく、何かを尊ぶことつまり大切に思うということ。そして『感謝』は有難いと思う気持ちを表すこと。どちらも何かを大切に想うという意味で根っこは同じです。

心は常に揺れ動いて定まらないもの。現代は善かれ悪かれあらゆる情報に翻弄される時代です。そこでは何かを大切に想うという気持ちも、心が不安定の時には非常に頼りないものになってしまう、そんな時こそ仏壇の力は発揮されます。我々の心の中にある何かを大切に想う気持ちが、姿を変え不動の状態でも物として形に顕れたもの、それが仏壇の形式と言えます。

心が定まらない時、仏壇に向かって手を掌わせれば心は次第に仏壇の向こうに広がる世界に同調していきます。それは仏壇が浄らかに厳られていれば尚の事です。つまり仏壇とはそのような作用を働かせる言わば一つの装置であり、言い方は悪いですが大いに利用すべきものです。そうすることで我々はまた自分を立て直して元気に生きれる……。そのことが御先祖様への供養の第一歩でもあるのです。

今回は、大分と理念に偏った長文になってしまいましたが、次回・次々回に亘りましては、仏壇周りの実用的な知識を簡潔にご紹介したいと思います。